

# 平成12年度さきたまアカデミア「博学連携」実施の記録

利根川 章彦

## 1 はじめに

埼玉県立さきたま資料館では、教育普及事業の一環として館の職員が講師をつとめて一般見学者に講演する形式の「さきたまアカデミア」という行事を実施しているが、平成12年度末で第31回を数える。この事業の枠の中で、ここ数年毎年1～2回、博物館関係施設の職員を中心とした社会教育関係者と小・中学校教員を中心とした学校教育関係者に集ってもらい、学校教育と社会教育の接点を模索し、将来的によりよい連携を保って教育活動を行うための研究会活動を実施している。それが「さきたまアカデミア『博学連携』」である。

この行事は昨年度までは教員の参加者を主眼において行われており、①さきたま資料館の体験学習を経験してもらって学校教育の場でも同様の体験学習を指導してもらい、②学校教育の場で歴史や民俗に関する体験学習を実践している方の事例報告、という2本立ての内容になっていた。

実施の方法や内容の面、あるいは広報のしかたにも関係があるかもしれないが、昨年までは博物館関係者の参加が少なく、博物館側と学校側の意見交換という側面を考えるならば、少々偏った形で行われているのではないかと評価されるきらいがあるような状況であった。もちろん、その時々でそれぞれ適切なまとめがされて、本誌の第9号から第13号までに渡辺勤氏・田村宜也氏によって論文・報告が掲載されているので、「博学連携」のかかえる現状や問題点は少しずつ掘り下げられ、今後のさきたま資料館の教育普及活動の中でどう考えていけばよいのか、その行動指針の一端はすでに示されている。

しかしながら、昨年までは、ともすれば学校現場を主たる学習活動の舞台と考え、博物館等の職員が従属的にそれに対処するという図式で考えている傾向があるように解釈できる状況であった。そこで、今回は博物館側・学校側双方がまったく平等な立場で議論できる設問を考えることはできないだろうか、と少々悩んだ末に、標記のテーマである「総合的学習」の問題につきあたった。

「総合的な学習の時間」については、すでにさまざまな雑誌や新聞で取り上げられてもいるが、平成14年度の新学習指導要領の本格実施・学校週5日制完全実施とともに、児童・生徒の「生きる力」を高める目的で、児童・生徒の自発的な「調べ学習」を主体にするものとして「総合的な学習の時間」も制度化することが決定している。そして、試行期間として位置付けられる時期に入っている現在でも、学校ごとのバラツキはあるものの、博物館施設を利用して「調べ学習」を実施しようとする学校は徐々に増加しつつある。県内の博物館・資料館等の施設においても、この学習活動に積極的に対応するケースが少しずつ見受けられ、「（この学習活動への）対応に苦慮した」という話も各地でしばしば耳にするようになった。

したがって、今年度の「さきたまアカデミア『博学連携』」でこの問題を取り上げるのは、博物館側・学校側双方に対して、時宜を得た企画として多くの参加者にアピールすることができ、「さきたまアカデミア」の講座のやり方としても実際の学習活動の方法のレベル、つまり、学習の現場でどのように学習活動を行うべきなのかを話し合うことによって、学校側の取り組み方だけでなく、博物館側の教育普及活動の取り組み方にも、より具体的な意見交換が可能になるであろうと考えた結果である。

平成12年度は、小・中学校の夏休み期間の後半である8月22日(火)に、「総合的な学習と博物館施設の教育普及活動」のテーマで実施した。参加者は41名で、内訳は博物館・公民館・図書館職員や市町村教育委員会事務局の生涯学習・文化財担当者など社会教育関係者22名、小・中学校の教員など学校教育関係者19名で、校長在任の方も2名含まれており、埼玉大学教育学部助教授で博物館学を担当している田村均氏にもご参加いただいた。なお、職員参加のあった機関・組織は以下のとおりである（さきたま資料館と報告者の所属を除く。掲載はアイウエオ順）。

上尾市立西小学校	入間市立宮寺小学校	岩槻市立柏陽中学校
大宮市立栄小学校	大宮市立芝川小学校	大宮市立土呂中学校
桶川市教育委員会生涯学習課	桶川市図書館	川口市教育委員会社会教育課
川越市立博物館	北本市立宮内中学校	旧坂東家住宅見沼くらしっく館
行田市大井公民館	行田市郷土博物館	熊谷市立奈良小学校
鴻巣市立赤見台第二小学校	児玉町立児玉小学校	埼玉県立自然史博物館
埼玉県立文書館	埼玉県立歴史資料館	埼玉大学
志木市立宗岡小学校	鶴ヶ島市教育委員会社会教育課	所沢市小手指公民館
新座市立第二中学校	飯能市教育委員会生涯学習課	深谷市立深谷小学校
富士見市立水子貝塚資料館	毛呂山町歴史民俗資料館	八潮市立大瀬小学校
八潮市立資料館	八潮市立八幡中学校	

本報文では、当日の事例報告と質疑・討論の経過の概要をまとめ、そこから考えられることのおいづつかを記述することにした。

## 2 平成12年度 さきたまアカデミア『博学連携』の概要

今回は、学校側からは鴻巣市立鴻巣西中学校教諭の山川守男氏の「総合的な学習の時間における博物館利用—学校側からの提言—」、博物館側からは宮代町郷土資料館学芸員の中村啓子氏の「宮代町郷土資料館における総合的な学習に向けた取り組み」という2本の事例報告をしていただき、その後、フリートーク形式の質疑・討論の時間をとり、あまりまとまったわけではないが、今回の講座を講評していただくつもりで、田村均氏に発言をお願いした。以下に、利根川がまとめた全体の概要を逐次ご紹介することにする。



## 【総合的な学習の時間における博物館利用－学校側からの提言－】

報告者：山 川 守 男（鴻巣市立鴻巣西中学校）

### はじめに

平成14年度から実施される新学習指導要領に先立つ移行期間として本年度から「総合的な学習の時間」が導入された。いまだ暗中模索の段階で事例報告とはならないが、この学習での博物館利用の可能性について学校側からの要望等を提言してみたい。

### 1 総合的な学習の時間における博物館の位置付け－新学習指導要領より

新学習指導要領においては、『総合的な学習の時間のねらい』として「自ら課題を見付け、自ら学び、……、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」「学び方やものの考え方を身に付け、……、自己の生き方を考えることができるようにすること」があげられている。次に『総合的な学習の時間の学習活動』として「国際理解、情報、環境、福祉、健康などの横断的・総合的な課題」等を例示し、「学校の実態に応じた学習活動」を行うものとしている。さらに『総合的な学習の時間の学習活動の展開にあたっての配慮事項』として「ボランティア活動」「体験的な学習」「問題解決的な学習」を積極的に取り入れ、「グループ学習・異年齢集団による学習など多様な学習形態」「地域の人々の協力を得つつ全教師一体となった指導体制」「地域の教材や学習環境の積極的な活用」などについて工夫すること、としている。この「配慮事項」の解説の中に「この時間の活動」への協力を必要とする人々や機関・団体として「公共図書館や博物館などの学習機関」が例示されており、「豊かな学習活動を展開するには……地域の学習機関、学習環境などを積極的に活用する必要がある。」と書かれている。

### 2 研究先進校における博物館利用の実際

#### ◇杉戸町立杉戸中学校の例

学習テーマは生徒の興味・関心に応じて自由に設定され、実践資料集に107例のテーマ一覧が示されているが、博物館に関わるものは郷土に関するテーマ15例中2件、環境に関するテーマ26例中4件であった。このうち、「身近にある杉戸町の遺跡」として復元住居見学・出前講座・発掘調査体験・土器作りなどの利用例があり、「古利根川の水質汚濁」としてさいたま水族館における「古利根川に生息する魚類の調査」の利用例があった。

#### ◇加須市立平成中学校の例

学習テーマは「自分の興味・関心のあるものを追求しよう」である。生徒研究要旨集には各学年から20例、計60例が示されているが、このうち博物館を利用したものとその可能性をもつものは「火おこし」・「水戸黄門」・「ビール」・「自動車」・「古代エジプト」の5例をあげるに留まる。

#### ◇その他

文部省編集の実践事例集で見ても、博物館の利用等が明記されているのは小学校60例中3例、中学校23例中4例程度である。

### 3 博物館利用の可能性

#### (1) 予想される学校側の活動

- ① 学習テーマと博物館利用が関連するケースとして、学校が設定した「地域」のような大テーマにおいて博物館利用が想定される場合と、生徒の自主的なテーマ設定において調査方法として博物館利用を組み込む場合がある。
- ② 博物館利用の動機には本人の経験・教師の支援・保護者の支援が考えられるが、いずれの場合でも、調査項目が明確な場合と不明確な場合がある。
- ③ 博物館の利用方法も多様であり、展示見学のみ・学芸員への聞き取り調査・電話や手紙の問い合わせ・インターネット（Eメール）による問い合わせ・体験学習等行事参加・資料借用・学芸員をゲストティーチャーとして招聘などが考えられる。
- ④ 個人的な調査や問い合わせが増加し、休日に限らず平日の「総合的な学習」の活動時間内にも行われることもある。

#### (2) 学校側からの要望—公立の歴史・民俗系博物館を中心として—

##### ① 各地域の状況に応じた博物館への要望

市町村単位で見た場合には博物館のある・ないという状況に差がある。地元には博物館がある場合には、その地域の歴史・民俗等の情報の中心であってほしい。「あそこに行ってください」と子供に教えられる存在であってほしい。地元がない場合は、近隣市町村の博物館に行けば自分の地域の情報を得られるようにしてほしい。たとえば、鴻巣市には博物館がなく、近隣では桶川市ということになる。さらに、県立館ならば埼玉県全体の概要に加えて、市町村単位あるいは小地域の情報も得られるようにしてほしい。たとえば、全県下の古墳の分布や時代背景の情報化という以外に、各市町村別の情報も持っていてもらいたいということである。

##### ② 体制の整備について

###### ○博物館・教育委員会・市町村史編纂室の連携

学校側から見た場合、この三者は同質であるが、「これについてはどこそこに行ってください」というような役割分担のような、対応の体制整備が進めば、学校側の混乱もなくなる。

###### ○博物館で教えてほしいこと

教師に対しては、当該博物館で学習できることや特色等の予備知識、生徒に対しては、疑問への回答の発展形として、調査の方法や見方・考え方へのヒント、学芸員が手薄な休日における生徒の訪問に対しては解説資料や対応マニュアルを準備して、一定の成果があげられるように、対応してもらいたい。



### (3) 今後の方向性

#### ① 総合的な学習の時間による博物館利用は急増しない

博物館利用は、数多くあるテーマや調査手段の一例なので、一気に急増したりすることはないだろう。ただし、問い合わせの形やタイミングは多様化するだろう。

#### ② 総合的な学習の時間のねらいをふまえた受け入れ準備が必要

学校からの要望に基づいて動く「待ち」の事業である。そこで、この学習のねらいの理解とその達成を支援するための準備を考慮してほしい。

#### ③ “博” “学” の連携を深める

この学習においては、教師中心ではなく、生徒の自主的活動が主体となる。話し合いの場を持てば互いの意図や課題が見えてくる。たとえば、「学校が博物館に望むこと」「生徒は具体的にどんな課題を持つのか」「博物館ができることは何か」「博物館はどんな方法でどれくらい利用されているのか」ということなどである。

### おわりに

今回のテーマに関したことは、さきたま資料館の『調査研究報告』第13号の田村宜也氏の論文がたいへん参考になった。また、学芸員と教員が共同して研究会（研修会）を開いて活動している例に飯能市などがある。今後もこの問題により具体的に取り組んでいきたい。

（以上、山川氏談）

## 【宮代町郷土資料館における総合的な学習に向けた取り組み】

報告者：中 村 啓 子（宮代町郷土資料館）

### 1 はじめに

平成10年12月、新しい学習指導要領が告示され、平成14年度の全面実施に向けて、宮代町内の小学校、中学校でも、新設される『総合的な学習の時間』の授業に対する試行が始められている。宮代町郷土資料館においても、ここ2年間に学校教育における資料館の利用方法に変化がみられ、従来から行われていた小学3年生の郷土の学習での資料館見学に加え、さまざまな授業に活用されている。ここではそうした、学校教育とともに取り組んだ郷土資料館事業についていくつか紹介したい。

### 2 宮代町郷土資料館の概要

宮代町郷土資料館は平成5年11月13日開館、野外施設として天保年間の茅葺き民家で旧蓮谷村名主の家である旧加藤家住宅、先々代の町長宅である旧斎藤家住宅、地藏院遺跡の一住居跡をモデルにした縄文時代復元住居、明治44年建設の旧百間小学校校舎である旧進修館などの移築建物や復元住居がある。資料館の事業として資料収集・整理・保存・展示・講座等を行う他

に、町史編さん事業・文化財保護事業を行っている。資料館資料は約 1,340点、町史編さんのために収集した古文書約24,000点がある。町史は平成12年度に通史編、平成13年度に民俗編を刊行し、平成14年度にはビジュアル版を作る。12年度現在では、資料編18冊が刊行されている。文化財保護事業は、開発に伴う遺跡の発掘調査などである。

### 3 事例

#### (その1) 百間小4年 旧笠原沼周辺の見学会

小学校4年の教育課程の中で埼玉県の歴史「見沼の開発」について町内で開発された例として「笠原沼」の見学による学習活動を行った。この時点の新田開発においては、沼地の泥を掘り上げて造った「掘上田」や用水が造られたが、その現地を実際に歩いて見学してもらい、資料館職員（「笠原沼博士」）、地元の農家の人（「掘上田博士」）などが要所要所に立って、児童の質問に答える、という形式で行った。事前に百間小教員と資料館の打ち合わせを数回行った。当日には「井沢弥惣兵衛には何人子供がいたか？」のような予想外の質問もあり、「掘上田博士」からは「掘上田」を造る苦労話や意外に豊作だったことなども説明された。

#### (その2) 須賀小6年 全体テーマ「私たちの町宮代再発見」に関する個別テーマごとの質問（「総合的な学習の時間」の取り組み）

須賀小の「課題解決をめざして自ら活動できる児童の育成」を主題とした「総合的な学習の時間」への取り組みとして対応した。須賀小では5月に「会津の良さを見つけよう」、6月にクラス発表、10月に「宮代の良さを再発見しよう」と取り組みを進めていた。

資料館には「縄文時代のお菓子を作ろう」「縄文時代の武器を調べよう」「獅子舞いのでき方」「昔の食べ物について調べよう」「縄文から江戸時代のこと」「石器を調べよう」の6つのグループが1度に来てしまい、3人の職員が1か所で全部に対応したので、かなり騒然とした状態に対応することになってしまった。また、須賀小は最寄り駅が東武動物公園駅の一つ先の和戸駅であり、徒歩での来館が大変であった。時間切れになって、答えきれなかったことについては後でリーダーに手紙を書いた。なお、この活動に関しては須賀小で発表会があった。

#### (その3) 百間小2年 宮代の正月行事について

百間小の学区に住む高齢者4人と資料館職員1人（中村）が、百間小体育館の5か所に分かれ、「冬至の火渡り博士」（地域の民俗行事として大人も子供も参加）、「正月行事博士」（1月1日から7日の大正月の行事）、「繭玉団子博士」（小正月に飾る）、「節分博士」（豆まき）、「みかん投げ博士」（五社神社の行事、昭和30年頃からみかんの奉納が始まったことにより開始）として児童の質問に答えた。コーナーごとの壁に、郷土資料館が各行事の時に撮影した写真のカラーコピーを貼り、郷土資料館で復元した繭玉団子のレプリカやニワトコの花を説明に使用した。写真は町史編さんのために撮影した1,200本のフィルムから選択し、行事に詳しい年寄りや資料館の民俗調査などで得たリストから紹介し、先生方が交渉した。

#### (その4) 須賀中1年 『宮代町の歴史について』

須賀中の『総合的な学習の時間』の授業の講師として、町政策企画課生涯学習出前講座「ま



ちしるべエ」に依頼があり、郷土資料館が担当。「まちしるべエ」には50のメニューの講座があり、その中の「歴史」については郷土資料館が対応する。常設展示解説図録のコピーを資料とし、講義約1時間の後、質疑応答。事前に電話で先生方と資料館職員が打合せ。

なお、宮代町には人材バンク制度もあり、「やりたいぞう」と呼んでいる。

#### 4 その他の事例

- (1) 写真パネル等を利用した学習……授業に企画展示パネルを掲示。「掘上田航空写真」  
「建築部材と供給地概念図」
- (2) 野外施設や資料を利用した学習……移築民家内で雨戸の閉め方や石油ランプの使い方を体験。昭和初期に電化される以前の夜の暗さを体験。
- (3) 出張展示……学区内の遺跡の出土品や民具の展示。資料館で収穫した綿の実を使った綿織り。PTAからの依頼。
- (4) インターネット版郷土博物館……町のホームページに郷土資料館コーナーを設置。町の歴史を詳しく紹介。催し物案内、遺跡調査・古文書調査の新情報を提供。
- (5) その他、体験学習として竹とんぼ・土器作り・和とじノート作り・草木染め。

#### 5 まとめ—これからの課題—

町内の各学校からさまざまな形で講座などの要請を受ける機会が増加した。しかし、その都度の対応に追われ、マニュアルや解説資料もなく、これから資料館として対応マニュアルを作らなければいけないと考えている。学校に対しては、児童・生徒の知りたいことに応えるため資料の準備等のためにも、1週間前くらいまでに何を知りたいかを知らせてほしいと思う。実物資料を見たいのか、民具を使いたいのか、どういう形を望んでいるのかも含めて分かれば事前準備もやりやすい。先生方から児童・生徒には「この辺のことを調べたら」と助言をしてほしい。むしろ、資料館側からの説明を児童と一緒に聞いてもらって助言してもらえばいいのではないかと思う。

先進の市町村では先生方と定期的に研究会を持っている例もあると聞いており、ぜひ当館も先生方との多くの意見交換を通じて、先生方や児童のニーズを把握し「総合的な学習の時間」等に対する連携を図っていきたいと考えている。

(以上、中村氏談)

#### 【質疑・討論要旨】

司会(利根川)：報告の内容についてまず質問を求めたい。その後、各学校や博物館・資料館で「総合的な学習の時間」についてどのように取り組んでいるか、具体的な事例を教えてください。という報告者からも希望もあるので、その辺の話聞かせていただければと思うが、如何か？

大谷雅志(県立自然史博)：「総合的な学習の時間」についての鴻巣西中の取り組みの現在の

状況を教えてほしい。

山川（報告者）：西中の取り組みとしては、まず生徒1人1人にテーマを決めてもらい、（学校としての）枠を設けなくて、興味をもったことについてやってもらうことにしている。現在のところ、博物館活用はほとんどない。

松本馨（北本市立宮内中）：学校として具体的にテーマを決めないことについてのメリット・デメリットはどんなところか？

山川：（メリットの面）資料1ページの要素にあるが、枠を設けずに進めるということは、枠に縛られずに好きなことができる。テーマの進め方については例示をするが、自分で考えてもらって、わからないことが出てきたら、「家族や先生に相談しなさい」と助言している。しかし、実際には1学期はまだあまりはっきりしたものがない。2学期からは具体的にやることになるだろう。

（デメリットの面） どういうテーマに絞ったらよいかかわからない、「計画を立てなさい」と指示してもなかなか円滑に進まないということがある。教師が支援する形で生徒1人1人と相談し、計画から実際の調査までに関して、「テーマを決めたら準備としてはこういうことがあるんじゃないか」「そのテーマならこういう博物館に行って調べてみたらどうか」という助言はしている。

松本：宮内中学校では、1年生には「郷土北本」というテーマを与えてやってもらっている。2・3年生は来年度からテーマを設けることになっている。テーマを設けないとすると、たとえば今年調べたものを来年どう生かすのか？

山川：テーマの決め方、調べ方、まとめ方など、自主的な活動ができるのか観察・検討しているところである。枠を設ける方がよいのか、枠を設けたとしても、将来はずすのがよいのか考えている。いろいろな意味でメリットがあると思う。

阿部泰次郎（岩槻市立柏陽中）：中村さんに聞きたい。先ほどの報告では、他の市町村の生徒に対応した話があったが、別の市町村から出ていって対応してもらうことについては、許容範囲はどのくらいか？

中村（報告者）：原則的には町内の学校に対応するが、今までには、連絡をもらって宮代町郷土資料館に来てもらったのは、杉戸町や大宮市の例がある。時間の調整がつけばできる。

司会：山川さんの報告で、博物館・資料館が地元でない場合は、近隣市町村の館で情報を得たい、あるいは県立館で県全体についてだけでなく各市町村情報も得られるようにという話があったが、県の責任が重くなるのではないかと少し心配であるが、鴻巣市にないことに対する例にあげられた桶川市から少しお話してもらえないか。

橋本富夫（桶川市図書館）：司会の要望からは少しずれてしまうかもしれないが、桶川市立郷土資料館ができた経過に近いところからお話したい。開館は平成2年であるが、この時期はまだ前回の学習指導要領の改訂時期であった。この時の指導要領で初めて地域学習に博物館の利用を書き込むようになった。それ以前は、昭和50年代後半から「学社連携」という言葉で学校と博物館の相互協力が話題になったが、当時はなかなか壁を乗り越えられな



かった。学校側も資料を提供してもらえなかった。同じ土俵で語れることはなかった。学校側の要望は当時でも「出前授業」「空き教室利用」ということであった。先生方とは教材利用に関して連携した。機関としての学校と博物館ではなく、職員同士の連携であった。桶川市の先生方の社会科教育研修会を資料館でやっていただくようになり、平成4年度・5年度は資料館側と統合して研修を行った。資料館側で作成していた資料のカードから何を読み取れるかということから、2次資料化しないと学校に持っていけないということがあった。教職員と共同して視聴覚教材作りを具体的作業として行った。デジタル教材として今なら多様なものがあるが、当時はまだスライドとかスチールビデオなどで考えた。この際、部屋を暗くしてしまっただけでは実際の授業に使えない、スライドではなくビデオ系のものがよい、という使い勝手の問題があった。スチールビデオを40タイトルくらい作ったが、先生方がいっしょに作ってくれた。今後の展開の課題としても考えられると思う。

田中英司（さきたま資）：さきたま資料館では、キューレーター・トークという名前を付けて「総合的な学習の時間」に対応するようになった。この時には、テーマをできるだけ絞ってもらい、それに対して、具体的にお答えしたい、という方針でやっている。生徒の自主性を尊重したいと思うが、考える筋道やヒントなどを与えた方がよいのだろうか？

山川：小学生・中学生の側からの発問はシンプルすぎてどう答えてよいかわからないようなことが多い。そこで、事前の準備、（行き先の）アポを取る方法や電話のかけ方、実際に行ってみて、情報を得た後のまとめ方などの指導をしている。各博物館等では生徒の質問に対しては直接答えを出してよいのではないだろうか。考え方のヒントは自分の周囲を見て考えてごらん、こういうところに行ってみてごらん、というような指示でよいのではないか。

田中：従来と違う対応やちょっと発展的なアドバイスが必要ではないか？

中村：宮代町郷土資料館には閲覧のスペースがなく、子どもたちに図書館の方が調べやすいのではないかと話したこともある。しかし、せっかく資料館に調べに来たのにそんな対応をしてよかったのだろうかと思った。総合的学習には、「生きる力」を育てるという意味も込められており、小・中学生の疑問に対し知っている限りのことを教えるというつもりで対応している。

平岡健（川越市立博）：学校の博物館利用の手がかりの話をしてよいか。各学校が、どうしてその単元をやるのか、ということがあるが、これは現代的テーマでは答えがでない。違う観点で取り組んでいたら、個々の課題の知識が目的じゃない、ということになる。したがって、川越市博では学校の先生と相談しながら取り組んでいる。テーマがたくさんあるということになれば、協力してもらおう施設もたくさんあることになる。はたして先生方が数多くの施設と打ち合わせができるのか。

山川：事前のアポや計画については、担当の教員が計画表をチェックする。外に出る場合は相手に迷惑をかけないように打合せをさせるようにする。生徒にアポを取らせることが普通になる。

松本：宮内中では、今年6月17日に北本の自然学習センターで、自然観察等の体験学習を行った。事前に打合せして、どういう内容で行うのか、自分でテーマを決めて調べさせた。その他の施設の利用に関しても、だれがどこに行く、ということを生徒に打合せに行かせた。多くの施設に依頼することになるので、夏休み前に学校長名の文書を作り、打合せや調査に「これを持って行きなさい」と話して生徒に渡した。

訪問することが予想できる何件かの施設については、先生方がまわって文書を渡してきた。残る細かいところは、生徒に持って行かせることになる。ただし、最低限のコミュニケーション・リテラシーというか、電話のかけ方、打合せや調査の話のしかたなどは、ロールプレイングの形で生徒に教えるようにした。

平岡：この問題でいちばん困っているのは入館料の扱いだ。通常は、教育課程の一環としての見学については事前の申請書の提出で無料にするのだが、突然来てしまったのをどうするのか、館内で多少の議論になった。できれば、博物館側の手続関係の情報を各学校に広報すべきかと思う。

橋本：先生方にお願ひがある。博物館等の施設と私が勤務する図書館とでは、ゆとりが違うので、対応が違ってくる。答えを出してあげなければ気の毒であるが、図書館は多数の利用者に司書が対応することになるため、1人1人に個別対応することはできない。そんな余裕はない。博物館は学芸員が個別に対応することが可能である。何をどう考えるかについては、図書館が「一般化」なのに対して博物館は「個別化」である。同じような対応を期待しても無理がある。

司会：話が中学校と博物館の対応の話に偏っている。会場には小学校の先生方もお見えになっているので、「総合的な学習の時間」にどのように対応しているか、少し話を聞かせてほしい。熊谷市立奈良小学校の新井先生か大澤先生、如何か。

新井弘美（熊谷市立奈良小）：学校のテーマとして「収穫祭」ということを決めている。このテーマに向けて人間と自然環境に関して総合的学習に取り組んでいる。あまり博物館には関係がないが、5年生は「農業」について調べている。米・麦・野菜などの栽培とか畜産ということになる。畜産に関連したことで調べさせると、こちらでアポの取り方などを教えないうちに、農家に出向いているいろ聞いてきてしまったということがある。たまたまであるが、獣医が訪ねて来ていて畜産と獣医の係わりのことまで調べていた例もある。その他、施設としては農協などに協力してもらって調べる必要がある。また、年寄りなど過去の畜産に詳しい人に聞く機会も考えて、人材バンクに連絡をとり、協力してもらえる方に学校に出向いてもらって説明してもらうこともしたことがある。博物館と関連することについては、大澤先生の方が発言できると思う。

大澤善子（熊谷市立奈良小）：奈良小学校では、6年生が「歴史」をテーマにして、米作りの歴史について調べてもらっている。困っているのは、市街地から離れているために調べる環境がないことである。出前講座などをやってもらえないかと、さきたま資料館にもお願いしたことがあるが、断られた。その他、資料がないかどうか探してみたが、見つからず、



インターネットで調べてもだめだった。今後も出前講座については考えてもらえないだろうか。

司会：中村さんの報告においても、宮代町内の学校でも資料館への距離の遠近によって同じ対応ができないという話が出ていたかと思うが、この点について意見はないか？

中村：須賀小のように電車の乗り継ぎをしないと資料館に来られない学校と、資料館のそばにあっていつでも来られる学校とでは時間的な制約があり、むずかしい点もある。

染井佳夫（入間市立宮寺小学校長）：私は入間市博物館に2年間関与していたことがある。この時、市内の学校2学年分が博物館に来られるバスの予算を付けていたが、27校全部来ても600万円かからない。それ以上来ても対応できる。入間市は交通の便が悪く、博物館に行ける条件が整っていない。市町村に働きかけてバス代を負担してもらうという方法がある。また、総合的学習ならば学年単位で行かないケースもあるだろうが、市内循環バスのような住民サービスも考えられよう。かつては博物館が教育普及にそれほど熱心でなく、学校教育との連携の立場に立ってない時期もあった。

今回のようにアカデミアで連携を進めるとするのは少し時代が変わってきたのかなと思わせる。ただ、もう少し要望が出てくる。たとえば、古い時代のことまでいなくても、5～10年前の行政のことなども大人向けでなく子供向けの資料があるとよいが、県民センターとか文書館などが関連すると思う。博物館からぜひ資料作成について働きかけていただきたい。また、平成14年以降、新学習指導要領が本格実施になった場合、職員の指定休が全部なくなる。そこで研修もさかんになるとちゃんとした受皿が必要だ。こういう普及活動への1日だけの参加というだけでなく、長い時間をとって博物館実習のようにやっていただいて教員も力をつけてくるべきではないか。

中島洋一（行田市郷土博）：少し意見を言わせてほしい。学校がなかなか動いてくれないことに博物館から資料を借りて授業をするということがある。行田市郷土博物館では、いくつかの資料を持ち運んで学校巡回展示とそれに付帯する1時間授業ということを行っている。これには市外からも要望があり、調べ足りなかったことを教えてほしいという話もある。今回も一方的に依存症のように話が進んでいる。学校内では博物館側からの「出前」に対する学習効果について報告書を作っているようにも聞いているが、博物館に情報を返してもらったことがない。（「出前授業」の効果などについて）どうなったのか博物館にフィードバックしてほしい。

司会：そろそろ時間いっぱいになったが、もう1点先ほど話題にのぼった博物館側と教員の研究会を行って、双方協力しながら郷土学習を実践している例として、飯能市の熊澤さんから教えていただけないか。

熊澤孝之（飯能市教委）：直接担当しているわけではないので、知ってる範囲のことしか答えられない。飯能市では、市内の教員の社会科の研究部会があり、2人の先生が中心になって進めている。「昔の道」「炭焼きの体験」「水棲昆虫」など授業の題材になることを調べて、教材化することを協力して行っている。この8月の頭には、近世の陶器を取り上げ

た。教育センターも関与して、研究部会で教材化の話を進めた。中学2年生を対象とし、地域の特色に応じた14の講座の中に入れた。こんなところでよいか？

司会：年間何回くらい会議を開いているとか、方法の点についてはわからないか？

熊澤：その点については詳しく知らない。

司会：桶川市ではどうか？

橋本：桶川市は小学校8校・中学校4校しかなく、日常的な情報のやりとりの中で、先生方の反応を返してもらえるようお願いしている。そうした日常的な積み重ねが重要である。

小久保徹（さきたま資）：今回の講座では、山川さんの報告にある、博物館への要望が気になっていた。情報のセンター的役割というのは、本音は情報の中身にあるのだろう。橋本さんの発言にもあったが、（文化財資料の）教材化の場合に原資料の高度な情報化ができるのか。絵や写真でない実物の感覚、実物のよさを示さないといけない。本物を見せるのが博物館の役割である。今回のような学習活動についても、いろいろな館で職員の温度差がある。中村さんの（報告に取り上げられた）例で安心したのは、復原した民家を利用した石油ランプの使用、雨戸の開閉についてである。夜の闇の深さ・静かさというのはなかなか体験できるものではない。夜の静寂の中の音の響き、ランプの明るさについての子供たちの体験など博物館の役割としてよく考えられている。

司会：もう時間がないので、何かどうしても言いたいという意見があればそれで終わりにしたい。

橋本：学校側・博物館側の双方の要望などが一通り出されたと思うが、中立的立場として埼玉大学の博物館学の田村先生から今回の講座の感想を聞きたい。

田村均（埼玉大学）：学芸員も教員も実習は体系だっているわけではない。若い先生にはなるべく学芸員実習を受けさせたい。染井先生のように「長期の研修をしてもらいたい」という話はよくわかるが、教員養成課程の学生まで学芸員実習をやるとなると受け入れ側の博物館が迷惑するのではないのだろうか。将来的には考慮すべきだと思う。

司会：最後に今日の講師お二人に講座を終わっての感想を聞かせていただいて閉会することにした。

山川：学校から博物館への注文が多くなった。事情があって対応できない点も多々あると思うが、（新学習指導要領本格実施のような）新しい展開があるので、学校の要望に沿って考えてもらいたい。

中村：最初は私のようなものが講師でよかったのだろうか、と不安だったが、他館や町外の動きを知ることができて、とてもいい勉強になった。

### 3 今回の報告・討議が提起する問題

今年度の報告及び質疑・討論によって、「総合的な学習の時間」に関する対策を博・学双方でそれぞれどのように考えているか、また、考えようとしているか、その思考法あるいは志向性のよう



なものをかいま見ることができた。本章では今回の報告・討議が提起する問題をまとめておきたい。

### (1) 山川・中村両報告について

#### a 山川報告

山川報告は、「いまだ暗中模索の段階」とは言いながら、研究先進校の事例を引き、学習テーマや利用方法の多様性も考えた上で、「総合的な学習の時間」に関連する博物館利用について、①博物館を情報センター化する（市町村単位の情報も備える）、②博物館・教育委員会・市町村史編纂室の連携による対応の役割分担、③解説資料・対応マニュアルなど博物館側の準備の必要性などを提言された。

ここでいちばん問題なのは、「情報センター」機能の問題である。しかも、山川氏が言うのは市町村単位で調べられるような資料の存在である。文化財所在地ならば、特に専門的な知識を持った人ではなくても各市町村教育委員会事務局で対応可能であるし、県立館でも何とか対応できよう。しかし、例として上げられた「博物館のない市町村の近隣市町村の博物館で情報を得られるようにする」というのは如何なものだろうか。実際に調べ学習に訪れる児童・生徒が資料を求めて来なければどのような性質の資料が求められる頻度が高いのか現状では読みにくいため、資料の用意のしようがない。もちろん、学校側がどうすればよいか示唆を与えてくれることが多ければ何とかなるとは思いますが、始まったばかりの現在では困難なことが多いのではなかろうか。

ただし、各地域に文化財に関連する組織が複数ある場合には、それらが役割分担をして分野別や問題の性質別にそれぞれ対応する、ということは現状でも十分可能である。

対応マニュアルという指摘については、今回の討論において田中氏も発言しているように、さきたま資料館としてはキューレーター・トークというシステムで、学校側からの書面による申込みを受け付け、学習内容に応じて各学芸員が専門別に対応する、という考え方を取っている。もう少し「総合的な学習の時間」が各学校に定着し、さまざまな学習のパターンが博物館側に理解されてこなければ、対応マニュアルも細部に及ぶものはできにくい。

率直に言えば、山川氏の提言の意味はよくわかるが、あまり水準の高いものを最初から期待されてもむずかしい。できれば、山川氏自身の実践にもとづくその後の考え方や学校側の情報を教えていただきたいものである。

#### b 中村報告

山川報告が事例報告というよりは提言という性格を持っていたのに対して、中村氏の報告は、まさに市町村の資料館が直面している状況について豊富な事例を提供してくれた。

特に、大きな4つの事例のうち、2つに地元住民の協力があったことが述べられており、江戸時代の新田開発の時以来の農法や、宮代町の昔の年中行事について協力者による解説が行われていることが注目すべき点である。

また、山川報告指摘の機能分担論についても、50のメニューをもつという宮代町政策企画課生涯学習出前講座「まちしるべエ」、人材バンク制度「やりたいぞう」というシステムがすでに成立していることには少々驚かされた。もちろん、生涯学習の取り組みということなら博物館ばかりでなく、公民館・図書館などの組織で実施しているものもあるわけであるし、町役場全体で取り組むこ



とに宮代町の意欲的な姿勢が示されている。

何よりもよかったことは、ありのままの資料館の活動を語っていただき、現在考えられる課題や反省点を明らかにしていただいたことである。現在取り組みの進んでいない館にとっては、むしろ模範解答に近い内容であったと言ってよい。欲を言えばきりがないが、宮代町外から生徒・児童が来た場合の対応、あるいは町内ではあってもやや遠くから来ているために時間が不足して設問に解答しきれなかったことについてもう少し詳しく話していただければ、「総合的な学習の時間」における学習活動の限界の問題についても考える材料ができたかもしれないと思った。

## (2) 報告・討議から考えられる問題について

ここからは、報告後の討議を踏まえて考えるべき問題の一端に触れてみたい。必ずしも十分とはいえない意見交換からも生まれた視点は豊富であったが、筆者が特に感じた問題を中心に述べておきたい。

### a 博物館の教育普及活動との関連

博物館等の施設には、自前の事業としての教育普及活動はかなり長く行われてきた経験があるのに、この点についてはむしろ学校側の反応はきわめて冷淡であり、染井氏の場合などは「かつては博物館が教育普及にそれほど熱心でなく、学校教育との連携の立場に立っていない時期もあった」と発言されている。各博物館としては、「教育普及に熱心でなかった」というよりは、それ以外の事業—たとえば常設展・特別展・資料収集・資料調査—に忙殺されて教育普及活動にあまりウェートをかけられなかった時代を長く経過してきた館が多いのである。これら博物館の本来やるべき仕事が近年の未曾有の長期的不況によって予算を大幅削減されたり、事業休止の止むなきに至ったりしているため、時間と労力はかかるが少ない予算でも実施できることの多い教育普及活動への力点を強めることがようやく見えてきたというべきなのである。この点についてはもう少し確認する必要があるが、博物館側から見れば、できるだけことはやっていたはずの教育普及活動であっても学校教育の場に立って考える人たちには「何を勝手なことばかりやっているんだ」と、各博物館・資料館の開催する土器づくり・ハニワづくり・わらじづくりなどの体験学習講座を冷ややかに見ていた方も多いのかな、と思ったりすることもある。しかし、これまでの教育普及活動の実施予告の広報は県民—市町村立館なら市町村民—一般を相手にしており、広報媒体も県(市町村)や県(市町村)が関連する団体の連絡誌等であって無料で催し物の概要を掲載してくれるものを選んでいたのであって、それぞれの館が期待するほど多くの人目に触れやすかったわけではなく、かなり積極的にイベント参加を求める人だけが参加するというようになっていたことだけは否定できないであろう。

また、「学校教育との連携」については、橋本氏が言われるような「教材利用」を通じた協力関係でもない限りは、博・学ともに方法上の積み重ねをしなかったというべきで、博物館側に非があるような言われようは一方的である。博物館側の立場からは、「学校にはそれなりに教育普及事業のお知らせをしているのに、どうしてももう少し博物館を利用するように生徒・児童に勧めてくれないのか」という言い分もあるのである。今は、どちらが悪い、という責任のなすり合いをするのではなく、どういう方法の学習活動を構築することが、より効率的で、成果もあがるのかをよく考え



るべきなのである。

「出前授業」の話も大澤氏から出された。小学校の場合は校外活動の物理的な危険性の問題があるために、「出前授業」の希望を語るケースが多くなるのはよくわかる。しかしながら、博物館であれば、どこの館でも「出前授業」ができる、あるいはやるのが当然だ、と思って連絡をとろうとする学校が多いのだとすれば、それはちょっと問題である。さきたま資料館の場合に限って言えば、極力「出前授業」を行わないようにしているのは、「出前授業」に十分対応できるだけの学芸員定数が確保されておらず、「出前授業」のための教材としての実物資料を運搬する費用・当日使用する資料作成の印刷費などの予算面の手当もされていないからである。過去の時期に当館が「出前授業」を行っていた時には、むしろそのために本来行うべき事業の運営に支障があったという館内の意見もあったように聞いている。ゲスト・ティーチャーとして学芸員が出向くだけでもよい、と言われるかもしれないが、館から遠い学校ならば出張旅費を行き先の学校が負担してくれるのか、という問題もある。さらに、実物資料が不在の状況で学芸員が話をした場合、何か絵空事を語っているようにとらえられても困る。埼玉県立埋蔵文化財センター・埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施して好評を得ている「古代から教室へのメッセージ」という出張展示プラス「出前授業」の事業も児童・生徒に実物資料に触れてもらうことが前提になっているのは疑いない。この点については、行田市郷土博物館における同様の取り組みがやはり新聞報道による賞賛などもあって熱心に行われていることがわかる。

しかし、これについても中島氏が言うように「学校内では博物館側からの『出前』に対する学習効果について報告書を作っているようにも聞いているが、博物館に情報を返してもらったことがない。どうなったのか博物館にフィードバックしてほしい」という状況があると、いったい何のために苦労して「出前授業」をやっているのか、と疑念がわいてくる場合も多かろう。「古代劇」と称したロールプレイング形式の「出前授業」をさきたま資料館も経験しているが、現在では行っていない。そもそも、この形式の出前授業を行ったことについての学習効果や問題点を改めて討議することができるような資料が学芸課の教育普及事業担当者間で引き継がれておらず、やはり学校側から返してもらったものが少な過ぎるため継続できにくくなってしまったのではなかろうか。

#### b 児童・生徒の博物館訪問と教員の引率、博物館側の対応

「総合的な学習の時間」に直接・間接にかかわって、児童・生徒の博物館訪問があった場合のことを述べる。

多少余談的になるが、児童・生徒の引率についてであるが、引率者の絶対数不足のため、教員ではなく、保護者（PTA）が引率してくることがすでに日常化しているケースがあるという。この場合には、児童・生徒のその場の言動一般について博物館側から指導しなくてはいけない、と心得ておくべきかもしれない。

さて、報告・討議の中では、実際に訪問するにあたっての訪問先の博物館等への連絡方法について多少の議論があったが、今回の参加者に限定しての話であるが、最もこの辺の取り組みが進んでいるのが、松本氏発言に見られるように、北本市立宮内中学校であった。学校側から生徒に対してコミュニケーション・リテラシーについて説明し、文書も出して、各所に依頼したというのである



から、学校側のすべきことの大半がすでによく理解されていると思う。ただし、問題はフォローの方である。学習活動でいちばん大事なのは、リアルタイムの「現場」であろうが、その次には、結果のまとめをどうするかである。学校で生徒たちの発表があり、なにがしかの記録が残るはずであろうから、その一部でもよいから博物館的施設にはフィードバックすべきである。この点は中島氏の前述の意見に同感である。学芸員は感想文だけが送られてくるのを単純に喜んで読んでいるわけではない。「また感想文だけか」という失望さえもあるのである。

なお、さきたま資料館の今年度実績ではまだほとんどないが、山川報告に語られているように、引率者がおらず、児童・生徒のみの訪問する例が今後増加してくるであろう。そうなった時に、田中氏の発言にあるように、館の方からすべて教えてしまってよいか、それとも示唆にとどめるべきか。あるいは、設問を提示してもらった時には、それが具体的ならよいが、抽象的だったら、一般論として答えるべきか、地域的な内容を重点に答えるべきか、という問題もある。現状ではそれぞれのケースに応じて対応するようにしているが、山川氏発言にあるように、「事前の準備」を指導してもらえるのであれば、やはり学校から実施日より前に指導者の教員に来ていただいて打合せするような考え方を持ってもらった方がよい。

この点に関連してさらに言うならば、松本氏が指摘するように、学校としてテーマ設定すべきか否か、という問題がある。報告者の山川氏は自主的な学習という側面を重要視して、テーマ設定しないメリットを主張するが、同じ児童・生徒が同じように「総合的な学習の時間」を何年かにわたって同じ学校で経験するという実情から考えた場合、テーマ設定をまったくしないことがメリットかどうか、筆者にも疑問がある。ただし、学校がこの学習活動を1年間の学習活動総体の中でどのように位置付けるのかが、各学校でその運営全体における比重が違ってしまえば、あえてテーマ設定しなくてもよいのかもしれない。そういう学校の姿勢と「総合的な学習の時間」のあり方はまだ把握されてはいないから、結論を急ぐ必要はないのかもしれないが、従来のカリキュラムを3割減らして行う学習活動の中身をどうするのかを、各学校でどのように草の根的に議論しているのかは博物館側にも情報を寄せてほしいものである。なお、学校のテーマ設定がなかった場合には、博物館側の対応の側面から考えれば、館を訪れた児童・生徒のグループごとの個別の学習テーマのみを念頭において行えるので、ある部分まではテーマ別資料作成を事前に行うことができたり、資料を作成するまでもなく口頭で答えるだけにすることもできたりすることから、少ない時間と労力で済ませられる点の一つのメリットではある。

また、中村報告の中には、6グループが一度に訪問してきて、それを3人の専門職員で対応した事例があげられていた。調べるテーマにそれぞれ関連性のないグループが一度に数多く訪れた場合、多くの職員で対応せざるをえない、ということは宮代町郷土資料館ならずとも往々にして起こることである。最低の対応マニュアルを作成する場合には、この点は十分考慮してしかるべきである。

さらに、市町村を越えて訪問するケースも報告されたが、県立館の場合はそれが常態となる。今年度のさきたま資料館の実績では群馬県藤岡市立東中学校の生徒3名が埴輪に関する調べ学習に訪れている。山川報告でも要望されているが、各市町村ごとの文化財資料データ化や想定問答集のようなものは考慮すべきであろう。市町村立館の場合は各市町村固有の問題を取り扱うことはでき



ようが、山川報告に言うような「博物館がない隣接市町村のデータ」まで用意するのは限度がある。個人差にもよるのだが、今のところは各市町村の専門職員の力量が頼りになるというほかなく、それを越える問題は県立館がバックアップするという方向性をとるべきであろう。

#### 4 おわりに

以上、今年度の「博学連携」について気の付いた点について若干の意見を述べてみた。議論の結果は似てくる部分があったとしても、今回のように「総合的な学習の時間」の方法レベルの問題点を正面から考えようという試みはまだ何回か行って討議を深める必要があり、具体的な筋道をはっきり示せるまでは続けてみたいというのが、事業実施後の筆者の正直な感想である。

この種の問題については従来理想的な議論に傾きがちであった。そのため、実現不可能な議論を試みたり、一方がもう一方に依存するとか従属するとかいうことを前提にしなければ考えられないようなことばかり述べるようになってしまう。むしろ今拙速ではあってもより必要とされるのは、どのように行うのが当面の取り組みとしては必要不可欠なことなのか、という最低水準論としての考え方であろう。

なお、本稿については筆者の貧困な認識のための誤解が多いことを懸念している。少なくとも報告や質疑・討論自体の記録については正確に記録すべく意を尽したつもりである。当日資料についても末尾に縮小して掲載しておいた。本稿で述べることができなかったことについては、この資料及び前掲の記録の部分をご参照の上読者諸賢にお考えいただきたいと思う。また、今回の記述について誤りや欠落にあたることがあれば筆者にご連絡いただきたい。

「博」「学」双方には施設や組織の形成過程にまったく違う思想が介在しているのであるから、日常的にどこまでお互いの歩み寄りをはかれるのかを考えるための、学芸員と教員の「話し合いの場」がもっとたくさん作られ、双方とも得るものがあるように討議を深めることが継続されるように祈念して擱筆したい。

テーマ：総合的な学習と博物館施設の教育普及活動

時間	内容
12:30~13:00	受付
13:00~13:15	開会行事 ・あいさつ ・日程説明及び連絡等
13:15~13:55	報告1 「総合的な学習の時間における博物館利用-学校側からの提言-」 講師：鴻巣市立鴻巣西中学校教諭 山川 守男 氏
13:55~14:05	休憩
14:05~14:45	報告2 「宮代町郷土資料館における総合的な学習に向けた取り組み」 講師：宮代町郷土資料館学芸員 中村 啓子 氏
14:45~15:00	休憩
15:00~16:15	研究協議
16:15~16:30	閉会行事 ・謝辞 ・連絡等

○はじめに

平成14年度から実施される新学習指導要領に先立つ移行期間として本年度から総合的な学習の時間が導入された。いまだ暗黒期の段階で事例報告とはならないが、この学習での博物館利用の可能性について学校側からの要望等を提言してみたい。

1 総合的な学習の時間における博物館の位置付け-新学習指導要領より  
・総合的な学習の時間のむら

- 2 総合的な学習の時間においては、次のようなむらをもって指導を行うものとする。  
(1) 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。  
(2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようとする。

・総合的な学習の時間の学習活動

- 3 各学校においては、2に示すむらを含め、例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、生徒の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとする。

・総合的な学習の時間の学習活動の展開にあたっての配慮事項

- 5 総合的な学習の時間の学習活動を行うに当たっては、次の事項に配慮するものとする。  
(1) 自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること。  
(2) グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態、地域の人々の協力も得つつ全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること。

〈(2)の解説〉 …さらには、この時間の活動の特質にかんがみ、保護者をはじめ地域の専門家や留学生などの外部の人々の協力も欠かせない。また、地域には公共図書館や博物館などの学習機関、様々な企業や工場、団体などがある。加えて川や山などの自然や文化財、伝統的な行事や産業などもある。この時間において豊かな学習活動を展開するには、これらの地域の人々の協力を得るとともに、地域の学習機関、学習環境などを積極的に活用する必要がある。 (F種04)

2 研究先進校における博物館利用の実例

◇杉戸町立杉戸中学校の例(平成9-10-11年度文部省研究開発校、「平成10年度実践資料集」より)  
学習テーマ=生徒の興味・関心に応じて自由に設定

- 郷土に関するテーマ[15例] 国際理解に関するテーマ[20例] 情報に関するテーマ[10例]
- 環境に関するテーマ[25例] 福祉・健康に関するテーマ[19例] その他[17例]
- 〔歴史・民俗系博物館にかかわるもの〕
  - 郷土史・民俗系博物館にかかわるもの
  - 郷土の歴史-杉戸町の変化の様子-(3年男)
  - 身近にある杉戸町の遺跡(1年男)
  - 〔自然系博物館にかかわるもの〕
    - 杉中の植物園産をつくろう(1年男)
    - 水辺の生物の生態(1年男)
    - 北葛飾郡の川(1年男)
    - 古利根川の水質汚濁について(2年男)
- 〔民俗系〕
  - 町史編纂室に町内の遺跡・遺物間い合わせ
  - 泉小学校の復元住居見学
  - 宮代町郷土資料館見学
  - 町の出前講座で町史編纂室から講師を招く
  - 登呂遺跡見学
  - 見聞調査体験
  - 町史編纂室で出土品の整理・修復手伝い
  - 陶芸室にて縄文土器作り
  - 自分で作った縄文土器ですいとん作り
- ◇加須市立平成中学校の例(平成9-10-11年度文部省研究開発校、「平成11年度生徒研究発表集」より)  
学習テーマ=「自分の興味・関心のあるものを追求しよう」

- 〔博物館を利用したもの、その可能性をもつもの〕
  - 火おこし体験パート2(1年)
  - 水戸黄門って本当はどんな人だった?(1年)資料館
  - ビール(2年)・恵比寿発酒記念館
  - 自動車について調べよう!(2年)博物館
  - 古代エジプトを探れ!(3年)美術館
- ◇その他(文部省「特色ある教育活動の展開のための実践事例集」より)
  - ◆小学校では60例中、博物館の利用等が明記されているものが3例程度
    - 台東区立根岸小学校…3年生、自分たちのまちについて調べる課題として博物館へ行く
    - 富田林市立小金台小学校…6年生、身近な歴史を探索するコースに博物館を入れる
    - 北九州市立鶴生田小学校…3年生、虫のことについて自然史博物館学芸員を招き話を聞く
  - ◆中学校では23例中、博物館の利用等が明記されているものが4例程度
    - 館山市立第二中学校…地域の歴史を調査するために博物館を訪問する
    - 中央区立銀座中学校…地域の歴史を調査するために史跡を訪問する
    - 香川県寒川町立天王中学校…郷土・文化コースの活動に遺跡調査を組み込む
    - 福岡教育大学教育学部附属福岡中学校…伝統文化を見い出す活動に博物館調査がある

3 博物館利用の可能性

(1)予想される学校側の活動

- ①学習テーマと博物館利用が関連するケース
  - ・学校側で「地域」のような大きな学習課題を設けて、博物館利用を想定するケース
  - ・生徒が自主的な学習テーマを設定し、調査方法に博物館利用を組み込むケース

②博物館利用の動機

- ・本人の経験から
- ・教師の支援から
- ・保護者の支援から

③博物館の利用方法

- ・展示見学のみによる調査
- ・学芸員等からの聞き取り調査(事前連絡の有無)
- ・電話、手紙による問い合わせ
- ・インターネット(Eメール)による情報収集や問い合わせ
- ・体験学習等の行事への参加
- ・資料の借用
- ・学芸員等をゲストティーチャーとして招聘

④その他

- ・個人的な調査や問い合わせが多くなる。
- ・訪問や問い合わせは休日だけでなく、各学校の総合的な学習の活動時間内に行われることもある。

(2)学校側からの要望-公立の歴史・民俗系博物館を中心に-

- ①各地域の状況に応じた博物館への要望
  - 地元博物館がある場合
    - ・その地域(市町村)の歴史・民俗等の情報の中心であってほしい。
  - 地元博物館がない場合
    - ・近隣市町村の博物館に行けば自分の地域の情報を得られるようにしてほしい。
  - 県立館で調査をする場合
    - ・埼玉県全体の概要に加えて、市町村単位あるいは小地域の情報も得られるようにしてほしい。
- ②体制の整備について
  - 博物館・教育委員会・市町村史編纂室の連携
    - ・学校側から見るとこの3つの機関は同質だが、総合的な学習の時間を考慮に入れた対応の体制整備が進めば、学校側の混乱もなくなる。
  - 博物館で教えてほしいこと
    - ・教師に対して：この博物館で学習できることや特色等の予備知識。
    - ・生徒に対して：(疑問への回答を見逃さず)調査方法や見方・考え方のヒントを与える。
    - ・学芸員の手簿による休日の生徒の訪問に対して：解説資料や対応マニュアルを準備して、一定の成果をあげられるようにする。

第1図 平成12年度さきたまアカデミア「博学連携」資料(1)



(3)今後の方向性

- ①総合的な学習の時間による博物館利用は急増しない
  - ・博物館とその利用はたくさんあるテーマや調査手段のひとつ。
  - ・問い合わせの形やタイミングが多様になる。
- ②総合的な学習の時間のねらいをふまえた受け入れ準備が必要
  - ・学校(教師や生徒)からの要望に基づいて動く「待ち」の事業。
  - ・この学習のねらいの理解とその達成を支援するための準備を。
- ③「博」「学」の連携を深める
  - ・「学」はこれまで教師が中心だったが、この学習では生徒の自主活動が加わる。
  - ・話し合いの場を持って互いの意図や課題が見えてくる。
  - ・学校が博物館に望むことは何か(学→博)
  - ・生徒は具体的にどんな課題を持つのか(学→博)
  - ・博物館ができることは何か
  - ・博物館はどんな方法でどれくらい利用されているのか(博→学)

○おわりに

【参考資料】埼玉県の博物館 (埼玉県博物館連絡協議会1998「あなたの町の博物館」より)



平成12年8月22日

講座『さきたまアカデミア(博学連携)』事例発表資料

宮代町郷土資料館における総合的な学習に向けた取り組み

宮代町郷土資料館  
学芸員 中村啓子

1 はじめに

平成10年12月、新しい学習指導要領が告示され、平成14年度の全面実施に向けて、宮代町内の小学校、中学校でも、新設される『総合的な学習の時間』の授業に対する試行が始められている。宮代町郷土資料館においても、ここ2年間に学校教育における資料館の利用方法に変化がみられ、従来から行なわれていた小学3年生の郷土の学習での資料館見学に加え、さまざまな授業に活用されている。ここではそうした、学校教育とともに取り組んだ郷土資料館事業についていくつか紹介したい。

2 宮代町郷土資料館の概要

開館 平成5年11月13日  
敷地面積 5,765.48㎡  
構造 鉄筋コンクリート造り2階建て  
建築面積 694.98㎡  
延べ床面積 1,186.22㎡

野外施設

- 田加藤家住宅(移築民家、江戸時代後期の茅葺き民家)
- 田斉藤家住宅(明治時代の瓦葺き民家、母屋のほかに蔵と米蔵)
- 縄文時代復元住居(資料館のある地蔵院遺跡の一住居をモデルに復元)
- 旧進修館(明治44年建立の百年小学校の校舎、移築)

組織

宮代町教育委員会社会教育課郷土資料館担当

館長(社会教育課長兼務)  
職員4名(うち学芸員2名)

業務

- ①資料館事業(資料の収集、整理、保存、展示、講座等)
- ②町史編さん(資料の収集、資料集等の刊行)
- ③文化財保護(調査、保護)

3 事例

その1 日時 平成11年10月21日 9時~11時  
対象 百年小学校4年生  
会場 旧笠原沼周辺(動物公園周辺)  
見学会

小学校4年生の教育課程、埼玉県の歴史の「見沼の開発」を同時期(享保年間)に町内で開発された笠原沼を例として学習する。享保年間に行われた新田開発により、堀上田や用水が造られたが、この授業では、これらの現地を実際に見学し、裏所に先生方や郷土資料館職員(笠原沼博士)、地元の農家の人(堀上田博士)が立ち、児童の質問に答えるというものである。実施にあたっては百年小学校の先生方と郷土資料館で事前に数回打ち合わせが行われた。

その2 日時 平成11年10月~12月  
対象 須賀小学校6年生  
会場 郷土資料館  
テーマ別に質問 ※全体テーマ「私たちの町みやしろ再発見」

須賀小学校の「課題解決をめざして自ら活動できる児童の育成」を主題とした「総合的な学習の時間」への取り組みが行われた。この一環として、6年生は「私たちのみやしろ再発見」をテーマに授業が行われ、10月には「宮代の良さを再発見しよう」というテーマで学芸員及び町職員が学校へ向かい、話をした。さらに、12月には「宮代町をくわしく調べてみよう」ということでグループ別にテーマを設け、調べる学習を行った。郷土資料館にも6つのグループが訪れ、それぞれのテーマに応じて担当学芸員が説明した。

その3 日時 平成12年1月26日 13時~14時  
対象 百年小学校2年生  
会場 百年小学校体育館  
宮代の正月行事について

第2図 平成12年度さきたまアカデミア「博学連携」資料(2)

百間小学校の学区に住む高齢者4人と資料館職員1人がそれぞれ体育館の5ヶ所に分かれ、「冬至の火渡り博士」「正月行事博士」「藪玉団子博士」「藪分博士」「みかん投げ博士」として児童の質問に答える。実施にあたっては事前に郷土資料館で撮影した写真を先生方がカラーコピーし、コーナーごとの壁に貼り、郷土資料館で復元した藪玉団子のレプリカやニワトコの花を説明に使用した。また、上記の事例に詳しい高齢者は資料館の民俗調査などで得たリストから紹介し、先生方が交渉した。

その4 日時 平成12年6月29日 13時～15時  
対象 須賀中学校1年生  
会場 須賀中学校卓球室  
講義 『宮代町の歴史について』

須賀中学校の『総合的な学習の時間』の授業の講師として町政策企画課生涯学習出前講座・まちしるべに依頼があり、郷土資料館が担当。郷土資料館常設展示解説図録のコピーなどを資料として使い、約1時間の講義の後、質疑応答。実施にあたっては電話にて先生と資料館職員で打ち合わせが行われた。

4 その他の事例

(1) 写真パネル等を利用した学習

企画展で作成した「榎上田の航空写真」や「建築物材と供給地概念図」を学校の授業で用いた。

(2) 野外施設や資料を利用した学習

①郷土資料館野外施設である移築民家（旧加藤家住宅）の雨戸を閉め、石曲ランプをつける。現在ではなくなった、木の雨戸の閉け閉めとともに昭和初期に電化されるまでの夜の暗さを体験する。

②昭和20年に作られた石臼でうるち米をしん粉にし、団子を作る。かまどの羽釜でゆでる（あるいは蒸す）。大豆をひいて作った黄な粉をまぶして食べる。

(3) 出張展示

小学校の文化祭で体育館で、学区内の遺跡から発掘された遺物や、民具（織くり・糸車等）の展示。資料館で収穫した綿の実を使って織くりを体験する児童もいた。PTA会長からの依頼で実施。

(4) インターネット版郷土資料館

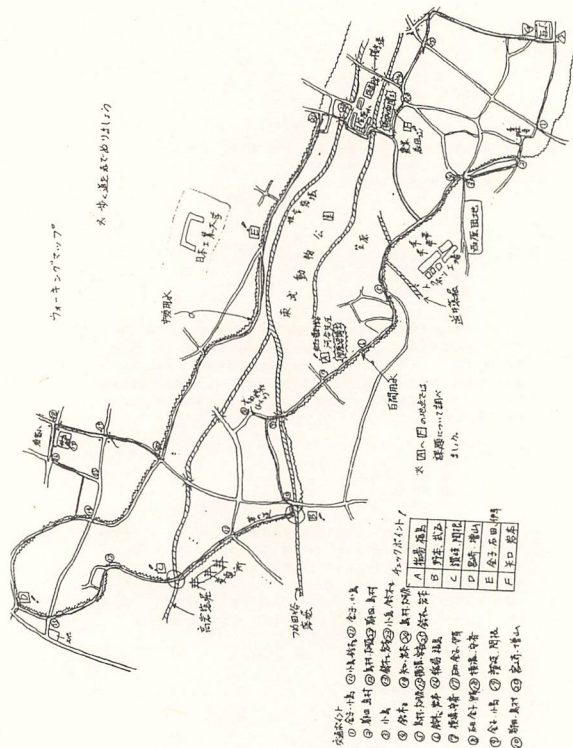
(<http://www1.sphere.ne.jp/miyasiro/musiam/m1-1.html>)

宮代町のホームページに郷土資料館のコーナーを開設（平成9年）。宮代町の歴史を詳しく紹介し、催し物の案内のほか、遺跡調査や古文書調査の最新情報を提供している。

5 まとめ これからの課題

平成14年度の全面実施に向けて、町内の各学校からさまざまな形で講座などの要請を受ける機会が増加し、郷土資料館の果たす役割は大きいことを痛感している。しかし、現状ではその度ごとの対応に追われているのが実情である。利用にあたって、基本となるマニュアルも未完成の状態である。

先進の市町村では先生方と定期的に研究会を持っている例もあると聞いており、ぜひ当館も先生方との多くの意見交換を通じて、先生方や児童のニーズを把握し「総合的な学習の時間」等に対する連携を図って行きたいと考えている。



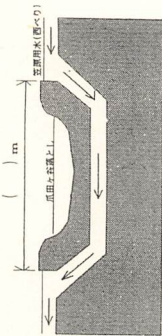
『郷土資料館・歴史の調べ』

学年	単元	単元名	学習の目標
1年	1-1	1-1-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	1-2	1-2-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	1-3	1-3-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	1-4	1-4-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
2年	2-1	2-1-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	2-2	2-2-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	2-3	2-3-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	2-4	2-4-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
3年	3-1	3-1-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	3-2	3-2-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	3-3	3-3-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	3-4	3-4-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
4年	4-1	4-1-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	4-2	4-2-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	4-3	4-3-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	4-4	4-4-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
5年	5-1	5-1-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	5-2	5-2-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	5-3	5-3-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	5-4	5-4-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
6年	6-1	6-1-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	6-2	6-2-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	6-3	6-3-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。
	6-4	6-4-1 郷土資料館の役割	郷土資料館の役割を理解する。

第3図 平成12年度さきたまアカデミア「博学連携」資料(3)



爪田ヶ谷の伏せ越し



見沼側(奥平) 掘り出し方、掘り出し方

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

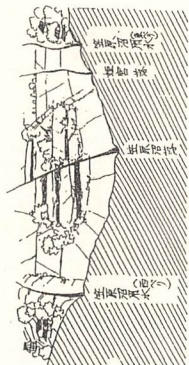
掘り出し方をつづっている様子



堀の断面図



笠原沼用水と笠原沼落とし



見沼側(奥平) 掘り出し方、掘り出し方

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

見沼側(奥平) 掘り出し方をつづっている様子

.....

.....

.....

.....

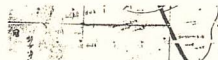
.....

.....

.....

.....

.....



見沼池用水と笠原沼池用水

見沼池は元々下流域の村々の用水源としての機能を持っていましたが、井沢弥野兵衛が1977年(1977)8月から9月にかけて見沼池の工事が始まりました。まず、下中流の利根川取水口から新たに新水路を掘り、笠原村で豊川と合流させ、その高路を利用し、上大崎地区(高岡町)に八間池・十六間池を築きました。ここで、豊川の本流と分岐させ、これより南は新たに新用水を掘りました。元荒川との交差点では柴山伏越を、綾瀬川との交差点では五葉掛渡井が構築され、見沼まで運水したのです。こうして、下流域の用水源を確保し、見沼は新田開発され、享保13年春にはすべての工事が終わったようです。

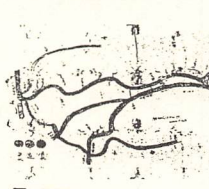


柴山伏越跡(埼玉県立博物館蔵)

一方、黒沼笠原沼池用水(中島用水)は、享保13年に見沼池用水からの引入口として中島伏越(高岡町)を造り、さらに、除堰塚待(久喜市)で黒沼池用水と笠原沼池用水に分岐させました。笠原沼池用水は西条原村鑛塚谷で南北に分かれ、北側の中島用水は須賀村や蓮谷村・中島村の耕地を灌漑しました。南側の百間用水は、野牛高岩落堀との交差点で上野田伏越を、爪田ヶ谷落堀との交差点では上野田掛渡井が構築され、さらに、第六天権で内堀用水を分派し、百間東村や百間中村・百間村の耕地を灌漑しました。



五葉掛渡井跡(埼玉県立博物館蔵)



用水系水絵図



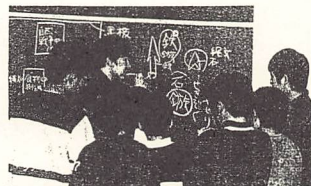
掛渡井の図(算法地方大成巻4)

イ、テーマ一覧表

◆11/30 図書館(休) 12/14 史料館・ふれ愛(休)

N	テーマ	リーダー名	数	11/30	12/7	12/14	1/18	備考
1	今と昔の歴史を調べよう	鳥越 一宏	5	●				歴史館・大宮
2	江戸時代の生活を調べよう	今 哲宏	5	●				歴史館・大宮、情報館
3	江戸時代の町を調べよう	長江 佑樹	4	●				(大宮市史館蔵)
4	江戸時代の町を調べよう	小野 望	2	●				大宮、情報館、法政の丘
5	江戸時代の町を調べよう	菊地 章浩	6	◎				大宮公園
6	今と昔の歴史を調べよう	土屋 社登	3		☆			大宮
7	ふれ愛センターを調べよう	松本 遊	5	◎				大宮ふれ愛センター
8	江戸時代の町を調べよう	大島 厚	2	●				大宮、(歴史館)
9	江戸時代の町を調べよう	西村 薫	6	●				大宮市史館
10	今と昔の歴史を調べよう	北村 孝彰	6		◎			大宮公園
11	今と昔の歴史を調べよう	松浦 愛	4	◎				大宮公園、高岡第一
12	今と昔の歴史を調べよう	渡辺 葉月	5	◎				大宮公園、高岡第一
13	江戸時代の町を調べよう	掛川 大介	5		*			大宮
14	江戸時代の町を調べよう	堀越 涼香	3	◎				大宮公園
15	江戸時代の町を調べよう	大久保知美	2		☆			大宮公園
16	江戸時代の町を調べよう	野口 昌彦	4	●				大宮公園、高岡第一、高岡第二
17	江戸時代の町を調べよう	武田 尚也	5	●				大宮公園
18	江戸時代の町を調べよう	山下 結衣	5	◎				大宮公園
19	江戸時代の町を調べよう	齋藤 幸香	6	●				歴史館・大宮市史館
20	江戸時代の町を調べよう	山本 裕太	4	◎				大宮公園
21	江戸時代の町を調べよう	武藤 淳一	5	*				大宮
22	江戸時代の町を調べよう	金丸 克裕	6	●				歴史館・大宮市史館
23	今と昔の歴史を調べよう	吉田 昌哉	5	●				大宮、高岡第一
24	江戸時代の町を調べよう	菱沼 要介	7	*				大宮
25	江戸時代の町を調べよう	浜田 淳	5	*				大宮

◎史料館(高岡第一) 50 ☆校場(高岡第一) 5 \*校場(高岡第一)の方本校22 ◎その他の施設38



矢じりのことがよく分かったぞ！

第4図 平成12年度さきたまアカデミア「博学連携」資料(4)